

新聞形式を用いたデジタルアーカイブ教材の開発計画 ～二次救急看護師のための研修以外での人材育成を実現する～

Development plan of digital archive materials using newspaper format
～Realize another human resource development training for secondary emergency nurses without ordinary face-to-face meeting～

生田正美¹ 松葉龍一^{1,2} 鈴木克明^{1,2} 喜多敏博^{1,2}
Masami IKUTA Ryuichi MATSUBA Katsuaki SUZUKI Toshihiro KITA

熊本大学大学院社会文化科学教育部教授システム学専攻¹ 熊本大学教授システム学研究センター²

1 Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

2 Research Center for Instructional Systems, Kumamoto University

〈あらまし〉二次救急医療施設で勤務する看護師は、資源も人員も限られた環境下にある。救急看護は看護師個々の知識やスキルが患者の生命に直結する場面が多く存在する。迅速・的確に救急患者の緊急度・重症度を判断し、患者の状況をアセスメントしていくことが求められる。そこで対面型学習会と新聞形式の資料を配布した学習会を7年間で40回行った。新聞形式の資料はA4用紙1枚で完結し、学習会に出席できないスタッフにも簡潔明瞭に学習会の内容を伝える手段として作成した。看護師の勤務体制上、学習会に対象者全員が参加できないことや、過去に作成した資料が十分に活用されていないことが問題であった。そこで救急看護実践力向上を目的に、蓄積された新聞形式の資料をデジタルアーカイブし、必要な時に必要な情報が利活用できる教材を開発することを計画している。今後この学習形態が、研修以外の人材育成を実現していくための方法となるよう考察する。本稿では、研究の第一段階として、対面型学習会と新聞形式の資料について述べる。

〈キーワード〉 看護師教育 情報検索 情報活用 デジタルアーカイブ 人材育成

1. 研究の背景と目的

日本の救急医療制度は、一次・二次・三次救急医療体制から成り立っている。二次救急医療施設数は三次救急医療施設の約10倍であり、救急搬送の約75%が二次救急医療施設に搬送されている。

しかし二次救急医療施設は三次救急医療施設に比べ、人員も資源も限られた現状と言える。

江口らは、「ケアや治療に関する判断、緊急性に関する判断において、二次救急が全次型・三次より優位に低かった。」と述べており二次救急医療施設における救急看護師の看護実践能力は、全次型・三次に比べると劣ることがわかる。

救急看護は看護師個々の知識やスキルが患者の生命に直結する場面が多く存在する。そこでA病院救急外来では、アセスメント力の向上を目指し、新聞形式の資料を発行した対面型学習会を開催しており2012年から2018年度までに40回行った。

新聞形式の資料はA4用紙1枚で完結し、新聞形式にすることで、「業務が忙しい中でも思わず

手に取ってしまった、そして読んでみたら面白かった」をコンセプトにした。

しかし現在行っている対面型学習会のデメリットとして、看護師は24時間体制で交代勤務を行っているため、学習会を開催しても、その対象となる看護師全てが参加することは不可能である。

新聞形式の資料はスタッフ個々でファイリングしたりノートにスクラップして活用している姿はあるが、紙ベースでの資料であり、過去に作成した資料が十分に利活用されている現状には至っていない。

そこで本研究では、対面で行っていた学習会の方法を再検討し、今まで作成した新聞形式の資料をデジタルアーカイブすることによって、二次救急医療施設の救急看護師が、必要な時に欲しい情報をすぐに入手することができるよう教材を開発する計画である。蓄積した新聞形式の資料を利活用することによって、研修以外の人材育成方法の一助になるのではないかと考察する。

2. 研究方法

第一段階: 対面型学習会と新聞形式の資料を発行した学習会の総括と問題点の抽出。

第二段階: 蓄積された新聞形式の資料をデジタルアーカイブとし、利活用できる教材の開発と、それを有効活用するためのしくみづくり。

蓄積された新聞形式の資料を、デジタルアーカイブとして、保存、管理、必要な情報をすぐに引き出せるしくみをつくることによって、必要な情報を直ちに使うことができる。蓄積・保存だけでなく、どう活用するかを含め教材設計する。

第三段階: デジタルアーカイブ教材を活用することによって対面で行っていた学習会を廃止し学習会以外での人材育成を考える。

本稿では第一段階について述べる。

3. 対面で行ってきた新聞形式の資料を発行した学習会の総括と問題点の抽出

対面型学習会は、救急外来での実際の事例を活用しグループワーク方式で情報収集の方法、アセスメント、看護問題、看護計画を話し合いグループで発表し共有した。グループワークとすることで、小集団学習の利点である参加者が自分の考えを述べ、他者と共有し互いに意見を出し、またそこから新しい考えを導き出すことをねらいとした。さらに思考中心的学习を取り入れることで、個々の考える力を引き出せるように工夫し思考過程を大事にする方法とした。「学習者は知識を伝達される者ではなく、他者との相互作用から経験を意味づけ、自分で知識を作り上げて構成していく者である」とらえ、これによって、実際に使える知識が形成される」と北浦らは述べている。講義形式での知識の伝達ではなく、グループワークとすることで、看護師自身の考える力を引き出し、思考を働かせられるよう工夫した。outputしていくことで思考過程の練習と成り得ると考え受講者中心の学習会とした。また実際の事例を通して学習することは、「生きた教材」として身近に感じることができ、また同じような症例が来るかもしれないという意識がより皆の関心につながっていくと考えた。その意味付けを実際の臨床の場で再確認し、スタッフ一人一人の臨床の知となっていくことを目指した。

さらに学習会のまとめの資料として、新聞形式の資料を配布した。A4用紙1枚で完結し、新聞形式にすることで、「業務が忙しい中でも思わず手に取ってしまった、そして読んでみたら面白かった」を狙っている。

新聞形式の資料は、①救急外来全体に伝達する②事例を共有する③看護の暗黙知を形式知へと変換する④目に留まる形式で興味をそそり、忙しい業務の中でも思わず手に取って読んでみたくなる⑤知識の伝達だけに留まらず事例を通して

自ら考えられる、以上5つのポイントを有している。

新聞形式の資料の内容は、事例、初期評価、一次・二次評価、緊急度、病状のアセスメント、病態生理、看護診断、看護計画、救急受け入れの準備であり、その中から必要な事項を選び掲載した。

今までに配布した新聞形式の資料の題材は、心筋梗塞、大動脈解離、脳梗塞 rt-PA、夏が来るぜ! 熱中症、偶発性低体温症、蜂刺され! アナフィラキシーショック、重症外傷を受け入れよう、急性薬物中毒、ぎっくり腰? が脳卒中、死にたい! 自殺企図、グリーンケア、意思決定支援、心肺停止患者家族の看護、新生児急性腎不全等がある。

学習会を7年間で40回開催してきたが、現在行っている対面型学習会のデメリットとして、看護師は24時間体制で交代勤務を行っている。そのため、学習会を開催しても、その対象となる看護師全てが参加することは実質不可能である点や、対象者を必修にした場合、何度も同じ学習会を繰り返し開催しなくてはならず非効率であった。

更に資料の活用面では、スタッフ個々でファイリングしたりスクラップして活用している姿は実際に見られるが、過去に作成した資料が再度、十分に利活用されている現状までには至っていない。

4. 今後の予定

第二段階として、アーカイブ化・デジタル化のメリットとその根拠を明らかにした上で、蓄積した新聞形式の資料をデジタルアーカイブ教材として開発する。開発予定のアーカイブのサンプルとの中でデジタル化のメリットがどう実現するかを考える。さらに利活用されるための教材活用ガイドの作成を行う。その後運用を目指し、エキスパートレビュー、ID専門家レビューを行い、評価、改善を行う。

第三段階では、研修以外の人材育成について考察する。研修以外の人材育成を選択したことの妥当性は何か、評価計画を含め検討する。

参考文献

厚生労働省(2018)救急医療体制の現状と課題について

<https://www.mhlw.go.jp/content/10802000/000328610.pdf> (参照日:2019.1.30)

江口秀子, 明石恵子(2014)我が国のクリティカルケア看護領域における臨床判断に関する文献レビュー. 日本クリティカルケア看護学会誌 10(1), 18-27,

北浦暁子他(2012)新人看護師への学習サポート 医学書院 p3